

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520296

研究課題名(和文) アメリカのマイノリティ文学における境域の意義と文学ジャンルの形成

研究課題名(英文) The Concepts of Borderlands for American Ethnic Minority Writings and Formation of Literary Genres

研究代表者

喜納 育江(Kina, Ikue)

琉球大学・国際沖縄研究所・教授

研究者番号：20284945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、従来のポストモダン及び多文化主義的な文学観を素地として形成されてきた「エスニック文学」及び「マイノリティ文学」が、一方では国民文学としてのアメリカ文学観を脱構築しながら、もう一方では、それらの新たな枠組みによって、アメリカ文学を固定観念化してきたのではないかという問題提起をし、そうした「エスニック文学」や「マイノリティ文学」の固定観念化に抗する「境域」の意義について考察した。アメリカ文学研究および比較文学的考察を通し、「境域」は、複数の文化、国家、言語、セクシュアリティの間に立脚点を意識しながら物語を構築する上で不可欠な批評概念であることを明確にした。

研究成果の概要(英文)：Based on the question of how so-called "ethnic literature" or "minority literature" as literary genres have contributed both to elaborating and simplifying understanding of American literature, this study explores the effect of the critical concept of "border" and "borderlands" to envision further alternatives to our comprehension of American literature as multicultural literature. The concept of "borderlands" works effectively not only to redefine the differences among those writers who were previously considered to belong to the same ethnic categories, but also to rediscover the ubiquitous quality of "borderlands" across different cultures and languages as it is found in other literatures than American literature, such as Okinawan literature. In conclusion, the concept of "borderlands" is indispensable to understand the literary expressions that emerges in the space between cultures, nation-states, languages, and sexualities.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：境域 アメリカ文学 マイノリティ文学 エスニック文学 多文化主義 ジャンル トランスナショナル borderlands

1. 研究開始当初の背景

アメリカ先住民文学やチカーナ(ノ)文学など、今日一般的にアメリカの「マイノリティ文学」と呼ばれるジャンルの形成の背景には、1980年代頃から台頭してきたポストモダンおよび多文化主義といった思潮があった。この思想の流れは、人種やエスニシティなどから生じる文化間の権力関係の中で「マイノリティ」として抑圧されてきた人々の文学の伝統を再評価し、「マイノリティ文学」を学問分野として深化させることに貢献してきた。しかしその一方、混血、移民、ディアスポラ、あるいはゲイ・レスビアンなど、複数の文化の境域にそのアイデンティティを意識する人々にとって、多文化主義の流れを汲む「エスニック文学」や「マイノリティ文学」などのジャンルは、しばしば単純化された類型の中に自らのアイデンティティを定位せざるをえない理不尽さを強いる枠組みであったことも事実である。すなわち、アメリカ社会を深く理解する方法としてあるべきアメリカ文学という人文学研究分野において、人種やエスニシティの差異にもとづいて分類された従来の「エスニック文学」や「マイノリティ文学」というジャンルが、結果的にアメリカ社会の「多文化」の現実を単純化し、固定観念化するプロセスに加担してしまっていると言わざるをえない状況があると考えた。本研究課題の着想に至った背景には、アメリカ文学における「マイノリティ文学」や「エスニック文学」というジャンルの可能性と不可能性への問いがあったと言える。

2. 研究の目的

上記のような問題意識のもと、本研究課題においては、以下の3点について明らかにすることを目的とした。

(1) アメリカのマイノリティ文学の固定観念化に抗する批評的戦略としての「境域」の可能性について探究する。「境域(borderlands)」とは、メキシコ系アメリカ人のアメリコ・パレデス(Americo Paredes)が、アメリカ南西部の米墨国境地帯における文化の特色として論じたのちに、同じくメキシコ系アメリカ人の女性(チカーナ)の書き手、グローリア・アンサルドゥア(Gloria Anzaldúa)が、その1987年の著書*Borderlands / La Frontera: The New Mestiza*の中で、政治やジェンダーの観点を交差させつつさらに複雑化した批評概念であるが、本研究では、異なる複数の人種、言語、そしてジェンダーの狭間に置かれるアイデンティティを表現するこの概念によって、「マイノリティ文学」として一括りにされているジャンルの内部に、固定概念化できない複雑な現実が存在していることを明らかに

する。

(2) アメリカのマイノリティ文学をグローバルなコンテクストの中に開いていく方策としての「境域」の意義について考察する。アメリカ文学は、歴史的にアメリカの「国民文学」及び「国家」の文学であることを含意してきたが、「多様性のある国家」という国家像を追求している点で、アメリカのマイノリティ文学もアメリカのそうした「国家」という枠組みを強化する過程と無関係ではなかったと言える。すなわち、アメリカ国家が標榜してきた「多様性」は、「国家」という閉ざされた空間を前提として具現化されてきたのであり、英語、キリスト教、そして民主主義といった要素が、人種や民族、ジェンダーなどの多様性を超え、それぞれ言語、倫理、政治思想の領域で覇権的価値として存在してきた。本研究においては、アメリカのエスニック文学を、アメリカ国内の価値を超えるトランスナショナルな視点から捉え直すとするプロセスにおいて、「境域」という概念がどのような意義を持つかについて考察する。

(3) 「境域」がアメリカ文学を超えて広く他の文学、例えば沖縄の社会や沖縄文学を理解する上でも援用可能な批評概念かどうかについて検討する。つまり、比較文学的に考えると、複数の文化の狭間に生じる「境域」は、アメリカ文学の中だけに存在するのではない。複数の文化間に、上位文化と下位文化、主流文化とオルタナティブな文化といった、コロニアルな権力構造のあるところに「境域文学(border literature)」とも呼べる文学の様態が存在すると言える。本研究では、「境域」をアメリカ文学研究の枠を超えて様々な文学のありようの中に見出すことによって、「境域文学」というジャンルの越境的な可能性を探る。英語以外の「境域文学」の一例として、日本語の文学ではあるものの、日本語と土着の言語の狭間における言語の揺らぎや、アメリカとのコロニアルな関係が戦後から現在に至るまで存続している沖縄の文学の「境域性」について究明していく。

3. 研究の方法

本研究は具体的に次のような方法で遂行した。

(1) 1990年代から注目された「多文化主義」や「ポストモダン」などの思想がアメリカ文学の再定義に果たした役割を改めて考察しつつ、こうした再定義を経たアメリカのマイノリティ文学が、20年後の現在ではいかに評価できるかについて考察した。

(2) アメリカ文学の作家の中でも、アンサルドゥアをはじめとするチカーナ(ノ)の

書き手や、日系作家のカレン・テイ・ヤマシタ、ベトナム系作家のトリン・T・ミンハなど、特に異なる文化圏を移動するディアスポラの経験を有する作家や作品に注目し、そのトランスナショナルな意識が著作にどのように反映されているのか、またそこに「境域文学」と呼べるどのような性質が存在しているのかについて調査を行った。

(3) アメリカ文学における「境域文学」というジャンルの可能性について考察するとともに、アメリカ文学を超えたグローバルな視野におけるこのジャンルの可能性についても理論化を試みた。特に、「境域」を生じさせる要素について考察を深めることによって、「境域文学」の射程を定義することを目指した。

4. 研究成果

(1) アメリカ文学における「エスニック文学」や「マイノリティ文学」をナショナルな国民文学の位置付けから、よりトランスナショナルな視野へと開いていくために、本研究では、主に日系アメリカ人作家のカレン・テイ・ヤマシタとベトナム系アメリカ人の表現者であるトリン・T・ミンハとの著作に注目し、両者の「境域」をめぐる言説に見られるトランスナショナルな想像力について考察した。どちらも英語以外の言語文化に精通しているという点では、アメリカ合衆国民でありながら、スペイン語と英語の間で「境域的な言語を構築してきた、アンサルドゥーアをはじめとするチカーナ(ノ)の書き手たちと共通しているが、ヤマシタとトリンにとっての「境界」は、南米(ブラジル)やアジア(ベトナムおよび日本)との間にあるという点で、同じ北米大陸にあって合衆国と隣接するメキシコ国境とは、物理的にも精神的にも文化的にも異なる距離感を伴う。両者の文学的表現や想像力には、アメリカ合衆国から距離を置き、俯瞰するトランスナショナルおよびトランスパシフィックな視点が認められる。

ヤマシタとトリンは、人種的にはどちらもアジア系であり、両者とも文化的・民族的に「アジア系アメリカ人文学」という枠組みの中で認識されてきた書き手であるが、「アジア系アメリカ人」という包括的なアイデンティティは、両者の経験に必ずしも一致しない。ヤマシタはブラジルや日本での日系人コミュニティで長期にわたって過ごした経験から、自らの「日系」というアイデンティティへのこだわりがあり、また、トリンも、ベトナム人、アジア人、アメリカ人などという人種的、国家的アイデンティティを抛り所とはせず、常にそうした境界の狭間に生じる「境域」に居場所を見出すアイデンティティを表現している。両者の文学を比較しつつ「境域」の視点から分析した研究は本研究によって

初めて実現したと考えられる。

(2) 「境域」を構成する要素には、主に国家や言語、文化の他に、セクシュアリティという要素も不可欠である。レズビアン・アイデンティティを自認するアンサルドゥーアも、*Borderlands/La Frontera*の中で自らのセクシュアリティにおける「境域性」を表現しているが、同じくシェリー・モラガもチカーナであり、レズビアンであり、かつ母親であるというアイデンティティを *Waiting in the Wings: Portrait of a Queer Motherhood* (1997)などの著書で表現している。ジュディス・バトラーは、セックスが身体的性差であり、ジェンダーが社会的に構築された性差であるという区別そのものが固定化された「二項対立(binary)」から解放されておらず、性差を本質的に決定づける拠り所となると信じられてきた「身体」そのものを「構築されたものである」と論じている[]。これは、「エスニック文学」や「マイノリティ文学」を固定観念化する本質主義的議論と同じ論理であると言える。こうしたセクシュアリティのパフォーマティビティに関する議論は、ヘテロセクシズムの論理を内包しながら固定観念化された「エスニシティ」や「マイノリティ」というカテゴリーに、性的な「境域」を生じさせることによって、固定観念を内部から攪乱する指標として機能することを、本研究を通して理論化するに至った。

(3) 本研究は、研究代表者が過去に遂行してきたアメリカ南西部における境域性に関する研究から派生した課題でもあるが、本研究では、アメリカ南西部と沖縄の「境域」としての共通点に関してさらに踏み込んだ考察を行った。すなわち、両地域とも、先住していた人々を征服または駆逐する形で新しい民族が侵入し、文化の異なる他者どうしが共存の道を模索しながら、その場所にコミュニティを構築してきたコロニアリズムの歴史を有している。また、他地域とは異なる風土と言語環境の中で、個性的な地域性を形成してきたという点でも共通している。こうした点について、ニューメキシコ大学の民俗文化研究者たちとワークショップの機会を設けて情報交換しながら、互いの文化の類似性や差異を探る作業を進めていった。明確な結論を論文等の目に見える成果に残すことはできなかったが、この作業を通し、「境域」という観点から、ニューメキシコと沖縄を結ぶ研究者のネットワークをさらに深化させることができた。

(4) 言語や文化を超えた「境域文学」には、「境域」を生き抜く特質を備えた「境域的人物(border character)」が存在する。研究代表者が長年関わってきたテキストに、アメリカ南西部出身の先住民作家レスリー・マーモン・シルコウによる小説『儀式(Ceremony)』

があるが、その主要登場人物であるテイヨは、アメリカ先住民の共同体に生きながら、その共同体の価値とは相容れない自らの混血の身体に悩み、苦しんでいる。しかし、「境域」という観点から読み解くと、多くの先行研究で彼を苦しめる要因として理解されてきたその人種的な境域性は、むしろ彼が自分自身のアイデンティティの揺らぎと交渉する能力を獲得し、揺らぐ自己のありようを受容していくプロセスを促す要素となっている。換言すれば、境域の不確定性は、同時にアンサルドゥアの言う「曖昧でまだ何も定まっていない」[] 可変的で、かつ可能性に開かれた状態を召喚し、登場人物が、しなやかに強靱なアイデンティティを構築していくプロセスに不可欠な特質であるとみなすことができる。不確定性を可能性という展望へと変換していく生命力を有するこうした登場人物を本研究では「境域的人物」と定義した。

この「境域的人物」が、どのような「境域文学」の作品中に存在するかを検証したところ、カレン・テイ・ヤマシタの小説 *Through the Arc of the Rain Forest* (1990) のカズマサ・イシマル、シェリー・モラガの戯曲 “Circle in the Dirt: El Pueblo de East Palo Alto” (1995) に登場するアフリカ系アメリカ人の教授、アナ・カスティーヨの小説 *So Far from God* (1993) のラ・ロカなどに、物語の中に生じる複数の対立的構造や利害関係を超越しつつ、「境域」に身を置くことで新たな価値を築く力を備えた「境域的人物」の特徴が認められた。

また、これらのアメリカ文学のテキストのほか、比較文学的な視点からは、沖縄の作家による小説の中にも「境域的人物」が表象されていることも確認した。具体的には、沖縄と、沖縄が遭遇したアメリカとの境域に立ち現れる登場人物で、又吉栄喜による短編小説「ジョージが射殺した猪」(1978)における語り手の米兵、崎山多美が2006年から2007年の間に発表した「クジャ連作」と言われる七作品それぞれの語り部などにも、物語の中に設定された場所とその外部との意識の狭間に立脚しながら全体を俯瞰するような境域的人物が登場する。このように、「境域文学」は、アメリカ文学を超える多様な文学に普遍的なビジョンを提示していると言える。

(5) 本研究の開始当時における程度は予測はしていたが、やはり今後の研究において対象にすべきと考えるに至ったのが、ハワイにおける文学の可能性である。本研究を通して、学会等様々な機会に受けた助言からも、ハワイの島嶼性およびその先住民と入植者との接触(contact)の歴史・文化的背景に「境域」の存在を認めることができた。ニューメキシコの米墨国境地帯をめぐる現地の研究者たちとの議論と同様に、ハワイ大学のハワイ先住民研究者および、移民社会研究者と、アメリカ社会における先住民文化および移民文

化に関して情報交換を行った結果、沖縄とハワイから生まれる文学には、それぞれの地域の持つ「境域」としての特性ゆえに共通するテーマが多く存在することがわかった。沖縄とハワイのポストコロニアルな意識に加え、沖縄からハワイに多数の移民を送った歴史的事実に鑑みると、ハワイ社会における沖縄系移民および沖縄系アメリカ人の存在も、今後の「境域文学」の考察に深く関わってくる事が展望できる。

引用文献

- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. 1990. New York: Routledge, 1999. p.12.
Anzaldúa, Gloria. *Borderlands/ La Frontera: the New Mestiza*. 1987. San Francisco: Aunt Lute, 1999. p.11.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Kina, Ikue. “Postwar U.S. Presence in Okinawa and Border Imagination: Stories of Eiki Matayoshi and Tami Sakiyama.” *The Japanese Journal of American Studies* 27 (2016) 査読有 印刷中

Kina, Ikue. “Storied Islands: Imagined Indigeneity as a Strategy for Transforming the Okinawan Community.” 『国際琉球沖縄論集』(2012) 査読有 pp.77-84

[学会発表](計8件)

喜納育江 「Karen Tei Yamashita の文学の境域性：ローカリティとグローバリティにおける日系アメリカ人文学の再定位」第68回日本英文学会九州支部大会(2015年10月25日)佐賀大学

Kina, Ikue. “Some Critical Issues in Contemporary Okinawan Literature.” Island Ecologies Workshop (2014年6月29日)台湾師範大学(台湾)

Kina, Ikue. “Colonization or Cross-Cultural Contact: U.S. Influence on Postwar Okinawan Culture and Society.” 欧米文化研究講演会(2014年6月27日)中央研究院(台湾)

Kina, Ikue. “Surviving in Contact: A Border Theory for Okinawa.” ALADAA: La Asociacion Latinoamericana de Estudios de Asia y Africa (2013年8月14日)ラ・プラタ大学(アルゼンチン)

喜納育江 「『先住民性』の商品化と文化的正統性：ツーリズムとプエブロ先住民のアート」アメリカ学会(2013年6月1日)東京外国語大学

Kina, Ikue. "Storied Islands: Imagined Indigeneity as a Strategy for Transforming the Okinawan Community." University of the Ryukyus and University of Hawai'i Joint Symposium: Okinawa and Hawaii at a Crossroads of Island and Gender Studies (2012年11月25日) 沖縄県市町村自治会館

Kina, Ikue. "Contact Zone and Border Theory for New Mexico and Okinawa." Critical Regional Studies (2012年11月9日) ニューメキシコ大学(米国)

Kina, Ikue. "Rethinking 'Empowerment' of Indigenous Okinawan Women: Feminism, Indigeneity, and Gendered Experience in Okinawa." Asia-New Zealand Research Cluster Symposium (2012年6月9日) オタゴ大学(ニュージーランド)

〔図書〕(計4件)

喜納育江編著『沖縄ジェンダー学3：交差するアイデンティティ』大月書店 2016年 全266頁

喜納育江・矢野恵美編著『沖縄ジェンダー学2：法・社会・身体 of 制度』大月書店 2015年 全313頁

小谷一明、巴山岳人、結城正美、豊里真弓、喜納育江編『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版 2014年 全345頁

喜納育江編著『沖縄ジェンダー学1：「伝統」へのアプローチ』大月書店 2014年 全288頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

喜納 育江(KINA, Ikue)

琉球大学・国際沖縄研究所・教授
研究者番号：20284945

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：